



Title	エルサレムのペヴスナー : エルサレム会議での経験と「優れたデザイン」の源泉としてのコンペティション
Author(s)	近藤, 存志
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71197
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エルサレムのペヴスナー

エルサレム会議での経験と「優れたデザイン」の源泉としてのコンペティション
近藤存志 フェリス女学院大学

ニコラウス・ペヴスナー (Sir Nikolaus Pevsner, 1902-83) は、1970年12月、エルサレム会議 (The Jerusalem Committee) の一員として、第三次中東戦争の停戦後間もないエルサレムを訪問した。この会議は、エルサレム市の拡張および近代化計画について、エルサレム市長テディ・コレク (Teddy Kollek, 1911-2007) に諮問する組織として設立されたものであった。世界各国から建築家、景観設計家、都市計画家、神学者、聖職者、哲学者、芸術家、経済学者、法曹関係者、作家、ジャーナリストなど、およそ70名の識者が招聘に応じ、建築・デザイン関連の分野からはペヴスナーの他、ルイス・カーン、フィリップ・ジョンソン、バックミンスター・フラー、イサム・ノグチ、ヘンリー・ムーア、ブルーノ・ゼーヴィ、ルイス・マムフォード、モーシェ・サフディといった面々が委員となった。

* * *

有識者たちの同会議への招聘は、大きく2段階を経て行われた。第一回のエルサレム会議は、1969年7月に北米、南米、ヨーロッパ、アジア、アフリカから計40名の委員が招かれて開催された。その翌年の12月には、建築、都市計画の分野からさらに委員が招聘され、エルサレム市の拡張・再開発についてより専門的な見地から議論することのできる都市計画小委員会が発足した。ペヴスナーがエルサレム会議への参加を求められたのは、この都市計画小委員会が発足した時からであった。当代を代表する識者たちは一様にエルサレムの歴史的、宗教的、考古学的価値を強調し、概念的な論理や政治的スローガンにも似た主

張を繰り返し唱えた。その一方でエルサレムに実際に生活する30万人の市民の生活環境の整備を念頭にした近代化の動きには強く反対した。

機能主義者であったペヴスナーの目には、西欧先進諸国から集まった識者たちの多くは、エルサレムの稀有な性格を重視するあまり、そこに住む人びとの現実・実情・実際的な要求を軽視しているように映った。

* * *

どうすれば西欧諸国の著名な建築家や景観設計家たちの独善的な主張と、エルサレムで今後も生活し活動していく住民、市民たちの生活上の現実的必要や要求との間に折り合いをつけることができるのか——エルサレム会議においてペヴスナーは、この点について苦心することになった。そうして彼は、不特定多数の市民の日常生活に奉仕する優れた都市空間を実現するために、コンペティションの実施を提唱することになった。

何故、ペヴスナーはコンペティションを行うことで何かしらの「解決策」を見出し得ると考えたのだろうか。——ペヴスナーは、コンペティションを開催することによって、複数の応募案を比較し、吟味する過程で歴史的、宗教的、精神的記念碑性を有する都市エルサレムが、現実に20世紀後半の時代を生きる市民の生活の場として相応しい発展を遂げるために必要な都市計画上の要件が、自ずと見えてくると考えたようである。このことは、ペヴスナーが1964年から1976年までイギリスのヴィクトリア朝建築協会 (The Victorian Society) の初代会長の任にあって、ヴィク

トリア朝期イギリスにおける建築・芸術の動向、とりわけ公共建築事業の営まれ方に身近に接していたことと無関係ではあるまい。

ヴィクトリア女王の夫君アルバート公が1850年に「われわれはコンペティションの時代を生きている」と語ったように、19世紀、ヴィクトリア朝期イギリスの建築界は「コンペティションの世紀」を歩んでいた。『ヴィクトリア朝期の建築コンペティション』(Victorian Architectural Competitions, 1983)の著者ロジャー・ハーパーは、1843年から1900年までの間に『ビルダー』(The Builder)誌に掲載された建築設計コンペティションの情報を整理して、この約68年間に『ビルダー』誌において言及されたものだけでも、計2542件ものコンペティションがイギリス全土、約780の市町村で実施された、と指摘している。

* * *

ここで特に注目すべきは、コンペティションとは応募のあった複数の設計案の中から最も優れた案を選ぶことを一義的な目的としつつも、それは同時に相反する芸術趣味や主義主張、価値基準を精査し、多様な提案、見解、発明を募ってひとつの計画に取りまとめるプロセスとして重要な役割も担っていた点である。ヴィクトリア朝期イギリスでは、コンペティションは単に一番優秀な計画案を選ぶ手段ではなかった。それは、多種多様な知見・見地・提案を広く収集し、比較し、融合を図り、再検討を繰り返すことで構想をより一層充実したものへと発展、展開させる機会としての意味合いも有していた。

コンペティションによって選ばれた設計案には、施主はもちろんのこと、評価委員・審査委員やその他の関係者らによって新たな注文や改善要求が出され、大幅な修正が図られたことも多く、コンペティションの一等案と最終的に実現された設計とが一見しただけで

は同じ設計者の手によるものなのか判別がつかないことも少なくなかった。審査過程で評価の重点が変更されたり、新しい条件が加えられたりするなどして、コンペティションはしばしば混乱を極めた。それでもそうした混乱や意見の対立によって、建築物に求められる設備やデザイン、実現のための諸条件に関する理解が深められ、多種多様な設計のあり方や可能性、選択肢を比較し、時には融合させるのに絶好の機会が、複数の設計案が競い合うことによって生み出されたのだった。

エルサレム会議招聘時に、ヴィクトリア朝建築協会会長を務め、ヴィクトリア朝期の建築事情に精通していたペヴスナーが、ヴィクトリア朝期のこうした事情に照らして、「コンペティションの効能」を信じていたことは十分考えられよう。

建築家や建築理論家たちが眼前の現実的問題や実際の必要から乖離した種々の独善的持論を主張し合うよりも、ペヴスナーは「コンペティションの効能」に期待した。実際にそこで生活を営む人びとの生活にかかわる現実・リアリティを無視し得ないコンペティションという〈構想、設計、比較、議論、変更、妥協、論争、批判という一連のプロセス〉の「効能」を彼は信じたようである。

エルサレムの将来像をめぐってコンペティションを開催することによって、〈空論・極論を否定〉し、〈具体的で実際的な判断〉に徹し、〈社会的要求や諸制約に対して妥協する余地と度量、寛容性〉を併せ持った多種多様なデザイン・計画案が複数提案され、その結果としてエルサレム市の住民の日常的必要に応えることのできる現実的計画——ペヴスナーの考える優れたデザイン——に関する議論が深化することを、彼は期待したのである。